A59a　大阪教育大学 51cm 望遠鏡を用いた社会連携事業

○松本桂、定金晃三 (大阪教育大)

現今の研究機関における社会・地域連携への意識の高まりに先駆けて，我々はこれまで十年以上にわたり，大学の所在地 (大阪府柏原市) の小学生と保護者を対象に，大学附置の口径 51cm 天体望遠鏡を用いた市民天体観望会を年二回，継続的に開催しているので，その活動について報告する．

この観望会は，柏原市役所環境保全課との共催の形態をとっている．これにより，(1) 参加者の募集や調整は市が行うため，特段の手続をすることなく市広報の公開講座欄に情報が掲載されるなど，広報活動にかかわる大学側の負担が小さい，(2) 参加者の集合・解散は市役所で行い，大学キャンパスへの引率も市職員により行われるため，大学側の人的資源への負担が小さい，などの分業体制による利点が得られている．また市の環境事業としての役割も併せ持ち，実施当日には室内において，大学側による星空の事前紹介などに加え，市の担当職員による大阪府内の環境問題についての講話も行われている．

観望会では 51cm 望遠鏡を主とし，参加人数に応じて小型の望遠鏡を相補的に数台用いている．51cm の口径は学術的には小口径とはいえ，一般的な感覚としては触れる機会の稀な大型の望遠鏡といえるため，潜在的な関心は高いようである．大学側の設備的な制限から参加者数の上限を約 50 名としているのに対し，定員割れはあまり生じていない．そのため実施にあたっては様々な面において学生の協力が不可欠であり，実際に市との折衝から当日の進行や観望会での対応まで学生が主体的に参加している．教員養成系大学としての大学教育 (実践的学校教員養成) の観点からも，学生の積極的関与は望ましい状況である．